

海浜空間における景観価値の形成プロセスに関する研究

- (その4) 「虹の松原」における「形成期」・「拡幅・発展期」の景観評価要因 -

海浜空間	景観価値	景観評価要因
景観評価主体	虹の松原	

正会員	渡辺 太樹*1
同	横内 憲久*2
同	岡田 智秀*3
同	三溝 裕之*4

1. 研究目的 本稿では、前稿で捉えた「松原の管理内容・管理実施主体」に加え、資料・文献^{1)~19)}とヒアリング調査より把握した松原の「景観評価主体」「土地利用」から「虹の松原」が名勝地として指定されるまでの「松原の形成期」(以下「形成期」)・「松原の拡幅・発展期」(以下「拡幅・発展期」)を対象に景観が評価された要因を明らかにする。

2. 結果および考察 表 - 1¹⁾は景観評価要因を捉えるため、松原の「景観評価」とその評価から抽出した「景観体験の型」、松原の「管理形態」「土地利用」を時系列で整理したものである。以降は、「形成期」・「拡幅・発展期」に現出した「色彩調和」「白砂青松」「樹間越し」「松原一望」「樹形鑑賞」により景観が評価された要因を述べていく。

(1)「色彩調和」 表 - 1の「景観評価」に示すように「形成期」では、「来訪者」である古河古松軒(地理学者)によって、枝葉を広げ始めた翠緑の松と波や夕日などの自然の地物の色が虹色のように調和した姿を「色彩調和」として評価するようになった¹⁾。

この頃は、「背後住民」²⁾(図 - 1参照)は農作業の傍ら、松原内では藩の許可を受け、生活の燃料を採取するための松葉かきを行っていた。しかし、松原内は入会地が形成され、さらに松原内が荒らされないように郷足軽が、常に「背後住民」や「市民」³⁾の監視を行い、松原内に自由に立ち入ることはできなかった。そのため、「背後住民」や「市民」などではなく、旅の途中で松原内を東西に貫く唐津街道(旧国道202号線)を通った「来訪者」が、休憩などの束の間に、生育しつつある松とそれを取り巻く自然の地物やその色の「色彩調和」を評価するようになったと考える。

このような「来訪者」によって松原の景観が評価され始めた頃、「形成期」中頃より「二里の松原」と称されていた松原は、「背後住民」などにより「虹の松原」と称され、その名は次第に「背後住民」などの中で定着していった¹⁸⁾。

(2)「白砂青松」「樹間越し」 「形成期」から「拡幅・発展期」に変わる頃、緑量と枝ぶりが際立つ松と、それを取り巻く白砂との色の対比を評価した「白砂青松」や松の樹間を通してその先に位置する沖合の島への海景を讚えた「樹間越し」が、「背後住民」により見出された(表 - 1「景観評価」)。

「拡幅・発展期」においても「背後住民」は、これまで行ってきた松葉かきを継続するとともに、細く弱い松や枯れ松を「除伐」することにより、適度に松の樹間は保たれ、環境

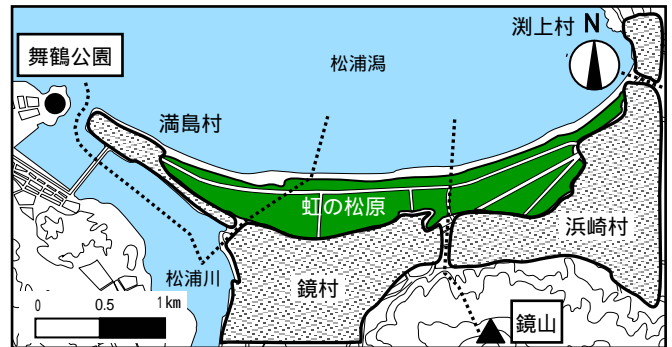


図 - 1 「虹の松原」における「背後住民」の範囲(■:網掛け部の4村)

の厳しい海浜に根付いた強い松の生長を促進させる管理が行われていた。さらに、表 - 1の「土地利用」に示すように二軒茶屋に続いて、1856年には新茶屋が松原内の街道沿いに設置された¹⁵⁾ことに加え、1868年の版籍奉還を契機として松原内の土地が開放され始めると、「背後住民」は自由に松原内へ立ち入るようになった。

このように、管理を通じて松の生育状況や松原周辺の地形状況に精通した「背後住民」が、松原内の滞留施設の設置によって主に利用しはじめ、松原への立ち入り制限の解除にとともに、松とより身近に触れ合い「白砂青松」や「樹間越し」といった景観体験を見出していったと考察する。

(3)「松原一望」 表 - 1の「景観評価」に示すように「形成期」の末期に松原の汀線側に増植林されたことで松原の幅員が拡大し、枝葉が重なり合うくらいに緑量を増してきた。そして、舞鶴公園を視点場に松原の湾曲形状を虹型として俯瞰景で愛でる「松原一望」が、「市民」により評価された⁵⁾。

「拡幅・発展期」に入り、「背後住民」が「虹の松原」の景観価値を認知し始める頃には、「市民」にも「虹の松原」の名が伝播し次第に定着し始めた。こうしたなか、1876年に、松原と城下町を結ぶ場所に位置する唐津城址が、舞鶴公園として一般開放される¹⁶⁾ことで「市民」や「背後住民」はその場所で憩うようになった。

このように、「市民」の中にも「虹の松原」の名が定着してきた頃に、汀線近傍の高台から松原の湾曲した形状を虹型として眺められる視点場が整備されたことにより、「市民」が松原の良好な俯瞰景として「松原一望」を発掘したと考えられる。さらに、「拡幅・発展期」の中頃になると、「市民」である富永鏗之助(当時:唐津新聞の記者)が新聞紙上で「虹の松原」という名を世間一般に広めた¹⁷⁾。

表 - 1 「虹の松原」における「松原の形成期」・「松原の拡幅・発展期」の景観評価要因¹⁾

景観評価 等 期年代	景観評価		景観体験の型				管理形態 (前稿より引用)	土地利用				その他
	景観評価主体	内容	視対象	色彩 調和	樹形 調和	松原 樹形 鑑賞		唐津 街道	茶屋	唐津 城址	ホテル	
「松原の形成期」	1783	来訪者(地理学者) 古河古軒軒	海浜砂地の漏白く、夕日さざなみに映じて、紅の色をさらにし、並松青々として、紅白青の色をまじへ、虹を見るがごとし(文献1)	砂浜 夕日 松			・法度 ・命・植林 ・背後住民					[1803] 江戸幕府
	1788	来訪者 洋画家 蘭学者 司馬江漢	唐津の内、二里の松原、徳末へ向かう路なり、雪さらさら降って景色よし(文献2)	松原 雪			・法度 ・地耕 ・地位 ・郷足軽 ・監視 ・背後住民 ・松葉 ・松葉かき ・松葉かき税定書					[1803] 江戸幕府 [1803] 形海開中興 「背後住民」に 「虹の松原」と 呼ばれる(文献16)
	1839	来訪者(国文学者) 岡白胤	松の色、水の色、貝の色、まさごの色と、さながら虹の引きはえたらんがごとし(文献3)	松原 水 貝 砂浜								
「松原の拡幅・発展期」	1898頃	背後住民	松浦海に面し海岸は白砂青松(文献4) 一面白砂散々として堆ぬ雪を敷き青松林立たる者は八尺小なる者尺余枝葉屈曲其趣趣て奇観を奏するが如し(文献4) 大鳥真の樹間に隠し見して清涼の所(文献4)	松原 砂浜 松								[1868] 幕府参道 (文献19) [1868] 国海科化 (文献19)
	1890	市民	湾曲を描く(橋が虹に似ているとして、「虹の松原」と呼ばれる(文献5))	松原								[1872] 地所永代売買 禁制が解除 (文献19)
	1892	来訪者(詩人) 浦原有明	潮の色や青く、砕ける波や白し、いさご明かなり、松みどりなり、加うるに東雲のむらさきと、夕映のくれないは、いみじくもやさし調和を見せたり(文献6)	松原 水 東雲 夕日								[1872] 地所永代売買 禁制が解除 (文献19)
	1903	来訪者(文学者) 中村郁一	翼を張れるがとき松原(文献7) 白い砂浜と青い松原が映え、虹の形状をしている(文献7)	松原 砂浜								[1872] 地所永代売買 禁制が解除 (文献19)
	1907	来訪者(詩人) 与謝野鉄幹 他4名	湾曲した海の縁を取って長く続く松原(文献8) 海より一刷毛に松原に撫つれば、松は一様に陸の方に靡いたその形がわざわざしからず面白い(文献8)	松原								[1872] 地所永代売買 禁制が解除 (文献19)
	1908	来訪者(先達) 牧川茂太郎	緑樹を透かして遠望すれば蒼波をみることができる(文献9)	松原 水								[1872] 地所永代売買 禁制が解除 (文献19)
	1914	市民 (郷土史研究者) 吉村茂三郎	松原内より見る大木さまさま松が秀を懸し、雅を争っている。樹幹錯互し、接しては連理の枝となり、離れては比翼の鳥の翔るが如し(文献10)	松								[1900] 馬車線延伸 (文献5)
	1926	来訪者 名譽鑑定委員	松浦湾の碧波に弓状を為すので虹の松原の稱ある故で、文士墨客は霧林と云ふ(文献11) 弓張月の影清く青風の気迫るの趣(文献11)	松原								[1912] 大正元年
	1927	市民 松代松太郎	松原内は白銀の砂と深緑の松樹のみ(文献11) 樹幹を格子状に見越して松浦湾の碧波に映帯する有様(文献11)	松原 砂浜 水								[1926] 昭和元年 特別保護樹 名譽指定 (文献6)
		来訪者(歌人) 中島義良 市民(芸術家) 廣重美木	広々と松原の梢が張り響く音が籠る(文献12) 松の梢の張り(文献12) 松の間に見上げれば唐津の御珠丸船が通る(文献12)	松								[1926] 昭和元年 特別保護樹 名譽指定 (文献6)
1928	市民 (郷土史研究者) 吉村茂三郎	松原、砂浜、海の色と虹形の形状(文献13)	松原 砂浜 水								[1923] 東の浜海水浴 場が開設 (文献15)	

【景観体験の型】 色彩調和：海浜を構成する樹木やその色の調和を評価。白砂青松、白、夕日、青、松の色をコントラストを評価。樹形調和：松が深窓となり主要線路を評価。松原一望：松、樹木の俯瞰を評価。樹幹錯互：松の樹幹を評価。【凡例】 実地主体が官、実地主体が住民、出来事・開港年、……、継続

その後、当地を訪れた「来訪者(文人墨客)」は、舞鶴公園を視点とした眺めに加え、「背後住民」にとっての信仰の地であった鏡山を視点場とし、眼前に横たわる虹型の松原を眺めた「松原一望」を新たに発掘した⁷⁾。
(4)「樹形鑑賞」表 - 1の「景観評価」に示すように「松原の拡幅・発展期」の中頃になると松原は、長い年月をかけて続けられてきた松の生育管理(松葉かき、除伐など)に加え、自然の営力(気温の変化、潮風など)に晒されたことで特異な樹形を呈した老松が点在していた。それにより、その特異な松の樹幹や枝振りを愛でる「樹形鑑賞」が「市民」³⁾により評価された¹⁾。

この頃、「市民」である実業家の村崎広輔が、1907年に「来訪者」(外国人や富裕層の日本人)向けの避暑地として松原内に滞在施設(海浜院ホテル)を建設し¹²⁾、それに加え、1923年には松原前面に「東の浜海水浴場」が開設¹³⁾すると、多くの「来訪者」が訪れ、滞在するようになった。

このように、「来訪者」は松原内に滞在し、松と接する時間が長期化すると、松の樹形を熟視することができるよう

になり、類い稀なる松の容姿を「樹形鑑賞」で愛でるようになった。そして、その様子が「市民」である吉村茂三郎(郷土史研究者)などによって、評価されたと推察する。

3.まとめ 以上より、本研究では松原の生長にともない、生育管理を実施する「背後住民」や新たな景観価値を付与する「市民」「来訪者」などが松原に介入することで、景観に価値づけがなされていくことを明らかにした。

【補注】
1) 参考文獻：資料およびヒアリング調査結果をもとに作成。(文獻)は引用・参考文献と一致する。番号がないものは有識者へのヒアリング調査によるものである。
2) 本研究では「背後住民」を「松原の形成期」において入会権を得ていた範囲(湯島村・鏡村・浜崎村・測上村)の住民とする。
3) 本研究における「市民」とは、2)の「背後住民」を除く(唐津市と浜玉町に居住している住民とする)。
【引用・参考文献】
1) 本庄榮治郎「近世社会経済叢書 第九巻」改訂版p183,1927.2.26
2) 興津野寛「日本古典全集第二期 西遊日記」,日本古典全集刊行会p160,1827.8.20
3) 岡白胤「松浦の家つと」,1859.3.23
4) 東松浦郷「長崎県 肥前国 東松浦郡誌 第四」,p15,p29,1883.12
5) 高岡行昌「虹の松原今昔物語」,日本松丘学会誌第47回全国大会pp60-67,2000
6) 浦原有明「松浦あがた」,読売新聞1874.6.7
7) 中村郁一「佐賀興郷土歌」,木下泰山堂p43,p50,1903.7.10
8) 二六社「東京二六新聞」,二六社1907.8.13
9) 牧川茂太郎「松浦名所案内」,唐津市川書店p77,1908.5
10) 吉村茂三郎「松浦紀行」,木下愛文堂p72,1914.3.25
11) 松代松太郎「唐津松浦島」,木下愛文堂p47,p73,1927.10.1
12) 吉村茂三郎「廣重慶徳」,詩と史の松浦島,松浦史談会pp46-47,1927.6
13) 吉村茂三郎「松浦叢書」,名著出版p255,1974.1.28
14) 高岡行昌「佐賀新聞「虹の松原もしり」,佐賀新聞社1989.9.11
15) 梅崎数馬「玄海国立公園 松浦島史蹟名所観光案内」,唐津新聞社p60,1964
16) 福岡市佐賀版監修「江戸時代(づ)り風土記41 ふるさとの人と知恵 佐賀」,農山村文化協会p60,p62,1995.2
17) 西日本新聞社「虹の松原を守ろう」,西日本新聞社1980.1.10,2.10
18) 司馬江漢「肥前の諸街道 街道をゆく11」,朝日新聞社p36,1983.2.20
19) 石井寛「フランス、ドイツ日本の森林政策の展開とその特徴」

* 1 日本大学大学院
* 2 日本大学理工学部・教授・工博
* 3 同・専任講師・工博
* 4 日本工営株式会社・工修